

日曜聖書講筵 感謝・讚美

2000年7月30日（東京新宿）

奥田昌道

四つの「非ず」 平伏しの道 簡単でいいんだよ 既にもう成就した そのことに本当に
気付きなさい 在らしめられて在る 無者キリスト道 「はいっ」と言って平伏す 無即
無限無量 ただあなただけ 祈り

●四つの「非ず」

今日はここへ来るのが三週間ぶりになります。先週は京都大学の学生たちとのスポーツ合宿というような恒例の行事があつて、そちらに行っていました。西兄弟から先日の「狭き門」という小池先生の講筵の文書とテープを送っていただきました。そこに、

「これは小池先生にとつても、ある意味で決定的な一つの転回点になるような夏の集会でした」

と書き添えてありました。この伊香保の夏期特別集会（1960年8月19〜21日、演題：「狭き門」「目覚めよ」「我は道なり真理なり生命なり」「神の羔」）に、私もこのとき初めて小池先生の集会に出ました。この頃、何人かが武蔵野集会から出て、手島さんの集会に移られたというこ
とで、

「霊力的宗教か、道念的福音か」

という短い文章の『曠野の愛』誌（34号、藤井武先生召天三十周年記念1960年晩夏号）をお書きになつて、そこでみなさんに配られた。これは非常に大事なものだと思つて、小池先生の御召天の記念会にそこから一部を引いて感話をいたしました。それが「エン・クリスト56号」小池先生召天記念号（1997年4月号、「小池辰雄先生告別式式辞」）にも収録されて
います。

今から4年前（1996年9月）、我々が新しい出発をする時に当たつて、これが大事だということ
で私が感話したものです。

そういうことから思いますと、伊香保の夏期特別集会の講筵の中で、「道念的福音か、霊力的宗教か」と訴えておられるのは非常に不思議な気がします。40年前から、一本の糸でつながっていたということ
です。この召天記念56号は時々取り出しては読んでください。この56号には小池先生の1996年のロマ書講筵5回分が要約されて入っています。

宗教の世界は非常に派手なもの
がもてはやされる。そういう、



「目に見えるもの、派手なものに惹かれてはダメだ。自分たちの行く道は狭い道、細い道だ。それは平伏ひれふしの道だ」

と言っておられる。そして次の、

「四つを警戒しなさい」
と言われた。

一つは観念信仰。当時の無教会信仰が聖書研究に走って、本当のみ霊の生命の世界、躍動するような力強い世界からずれを来たしている。そういう観念信仰はだめだということを書いてある。

それから次はご利益りやく。日本の宗教はだいたいご利益宗教で、

「あそこへ行けば病気が治る、あそこへ行けば商売繁盛する、運が開ける」

とか、とにかく人間の幸福を約束する宗教。これはご利益宗教です。キリスト道はそれではない。「己を棄ててかかれ」と言うんですから。キリストご自身も神の道のために自分を棄てられた、献げられた。

「己を憎まずば我が弟子となることを得ず」

と。ご利益とはまったく反対です。だから日本人は随まいていけません。キリスト教の中でもご利益的な幸福を約束するものにはついていく。これは霊力的宗教とまた結びつく。ご利益というのは何かの霊力と結びつかないと本当のご利益になりません。そこがむずかしいですが。

それから、三つ目が霊的傲慢。

それから、四つめがパリサイ。このパリサイと観念信仰とはちよつと結びつく面がある。つまり己を義よとして他を審く。自分を高しとして他を見くだす。これがパリサイなんです。このパリサイとまたさっきの霊力的宗教とも結びつくところがある。

「自分のところにはこんな徴が伴っている。お前さんたちのところには何も無いじゃないか」

とか言っておられるわけですね。だから、それぞれが少しずつ繋がっているわけですね。それに対して、小池先生の唱導された「キリスト道」というのは平伏ひれふしの道なんです。自分を投げ出して、

「自分は何者でもありません、ただキリストのみ意こころのみ」

と言っておられるわけですね。そこに自分を挺身ていしんしていく道です。そこに聖霊が働き給う。その聖霊の働きは、時には物凄いご利益的な面で働くかも知れませんが、病が癒されたり、こんな徴が伴ったりと。しかし、それを、

「徴を徴として追い求めたらダメだ」

と先生は言っておられるわけですね。キリストの時代の人々がキリストに躓ついたのは、徴を本当の意味の徴として——それは神の啓示なんです——その現象を通して神様が本当に語



つておられるところを受けとらないで、微の現象面だけを有り難がつて求めた。そこでみな躓いている。自分の思い通りにならなければ、キリストを十字架につけて審いてしまつたわけです。

●平伏しの道

たとえばイエスが五千人の人たちを五つのパンと二匹の魚で養われたという出来事があります。満腹したので人々はイエスを捜し求めて、王にしようとして、追いかけてきたという。イエスは身を隠して人々の手から逃れられた。

「あなた方が来たのは本当の意味で徴を見たからではなく、パンを食べて満腹したからである。朽ちる糧かてのためでなく、本当の生命に至る糧のために働け」

ということを仰いました（ヨハネ6）。

荒野の試み、そこでキリストが闘われたのはまさにその「平伏し」の道なんですよ。

「石をパンに変えてみる、あなたにはそれだけの力がきているはずだ。あなたは神の子だ。力がきている。石をパンに変えてごらん。人々はたちどころについてくるよ」

とサタンが誘う。

「人が生きるのはパンだけではない、神の言、神の生命で生きるのだ」

キリストはその時、飢餓の只中です。四十日四十夜断食されて、もう骨皮筋右衛門えもんみたいな姿ですよ、肉体的には。その時にパンの誘惑です。

「人々はまさにこれを求めているじゃありませんか。霊的なものも大事ですけれども、霊も大事ですけれども、パンも大事なんですよ。あなたの力をもってすれば、わけないじゃありませんか」

と言って、誘惑したのをキリストは断られた。それから、

「高い所から飛び降りてごらん、天使が支えるんだから。あなたは傷一つしない。神様が天使を遣わして護られる。これを人々に見せたら人はついてきますよ」

「神を試みるべからず」

と、徹底的な平伏しなんです。

「私と取り引きしないか。私と手を繋いだなら、この世の栄耀栄華を全部さしあげますよ」

「神にのみ従え」

と言って退けられた。あの荒野の試みの三つに本当の姿が表れている。

小池先生が、

「霊力的宗教ではない。道念的福音だ」

ということを言われた、その「道念的福音」というのは、その荒野の試みに闘われたキリ



ストの姿、平伏しの姿、無者の姿、それを徹底的に宣言されたわけです。小池先生のもとから流れていった人たちの群というのは非常に派手でした。人間が崇められてしまったりもします。「そうではない、キリストだけだ」と言われた。

だから、「狭き門」という、先生の告白は本当に無力に徹して、

「人間の力じゃない、キリストだけだ」

という、無者に徹した姿がそこに告白されています。そういう意味で、本当に私は大変感動して、このプリントを読ませていただきました。同時に、その一本の線がずうっと、その後の先生を貫いているし、また私の中にもそれが貫いているということを知って、とてもうれしく思いました。

● 簡単でいいんだよ

晩年の先生は物凄く簡単ですね。

「うれしくてしょうがない、ありがたくてしょうがない」

と。あれは本当だと思えます。ロマ書8章だって、1978年にはもう少し詳しく丁寧にお話になりました。けれども、この1996年はもう簡単すぎて、ほかの話が多すぎて、

「いのちの御霊のみたまの法のりは、なんじを罪と死との法より解放ときほなしたればなり」

というところは、

「うん、その通りだよ。これを何回も繰り返して、自分の中で何回も反芻さぐしなさい、

それで充分だ」

と言っておられる。1978年のテープは、私は本当に感動してドイツで聴かせていただいた。まさに目から鱗うろこが落ちる思いで受けとらせていただいたものだ。

今日、私が申し上げたいのは、その簡単な先生を本当に受けとろうということです。

「簡単でいいんだよ」

と言う。皆さんは、では、

「そんな簡単でいいと言ったって、その証拠を下さい」

と仰るだろうから、証拠を挙げましょう。

私の今日の話の演題をつけるとしますならば、それは「感謝、讚美」です。まず感謝が来て、それから讚美があふれくる。どうして感謝できるのか。さっきの、ご利益じゃないんですよ、お金は儲からないんですよ、それでどうして感謝ができるのか。これが今日のローマ書です。

「あなた方を罪と死との法より解放したればなり。生命の御霊の法があなたをつかまえて離さない、活かしている。あなたのこととはもう何も無い。キリストが全部してくださる。それをただ平伏して、ありがとうございますと言うしかないんだよ」

と、それなんです。イザヤ書の61章を見てください。



「主エホバの霊われに臨めりこはエホバわれに膏を注ぎて貧しき者に福音をのべ伝うることをゆだね我をつかわして心の傷める者をいやし 俘囚にゆるしをづけ、縛められたるものに解放をづけ、²エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ

「刑罰の日」とは審判の日です。我々にとっては救いの日になるわけです。

又すべて哀しむものをなぐさめ、³灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ悲哀にかえて歡喜のあぶらを予え、うれしい心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり」(イザヤ61・1〜3)

ここに非常に逆説的といえますか、反対のことが書かれていますね。心の傷める者はいやしを受ける、俘囚はゆるされる、縛られている者は解放される、かなしむ者はなぐさめられる。灰にかえて——「灰」というのは一番悲しみのどん底が「灰」です——よろこびの冠——「冠」は喜びの栄光の印です——を与えられる。逆転現象が起こっている。

● 既にもう成就した

キリストは、ルカ伝4章にあるように、聖霊を受けられてから、四十日四十夜の試み、サタンとの対決をなさった。そしてそれに見事に勝利されて、み霊に満ちあふれて帰ってこられた。

¹³「悪魔あらゆる嘗試を尽くしてのち、暫くイエスを離れたり。」

¹⁴イエス御霊の能力をもてガリラヤに帰り給えば、その声聞あまねく四方の地に広まる。¹⁵かくて諸会堂にて教をなし、凡ての人に崇められ給う。

¹⁶偕その育てられ給いし処のナザレに到り、例のごとく安息日に会堂に入りて、聖書を読まんとして立ち給いしに、¹⁷預言者イザヤの書を与えられたれば其の書を繙きて、かく録されたる所を見出し給う」

ここで開いてみられたのがイザヤ書61章です、ルカ伝に引用されているのは少し簡略にしとありますけれども。

¹⁸『主の御霊われに在す。これ我に油を注ぎて貧しき者に福音を宣べしめ、我をつかわして囚人に赦を得ることと、盲人に見ゆる事とを告げしめ、¹⁹圧えらるる者を放ちて自由を与えしめ 主の喜ばしき年を宣伝えしめ給うなり』

パウロもそうですけれども、聖書の引用というのはかなりルーズですよ。厳密ではありません。けれども、ちゃんと大意はつかまえている。一言一句その通りなんていう引用はしてません。けれども、その心をしっかりとつかまえている。要するにここでは、イザヤ書のこの預言はもう成就したと。

²⁰イエス書を巻き、係りの者に返して坐し給えば、会堂に居る者みな之に目を注ぐ。そうしたら、イエスは次のように仰った。



21 イエス言い出でたもう『この聖書は今日なんじらの耳に成就したり』（ルカ 4・1〜21）

と仰った。これはすごいですよ。イザヤ書を読まれて、

「これはもうあなた方の耳に今日、成就した」

「これは、これから成ることではない、もう今日完了した」

と、そう仰ったという。我々にとつてはどうでしょうか。本当に成就したんです。そうでしょう。パウロのロマ書8章2節、

「いのちの御霊みたまの法は、のりなんじを罪と死との法より解放ときばなしたればなり」（ロマ8・2）

キリスト・イエスの中に在らしめられて在る者はもはや罪に定められず。もう終わったよと。キリストが御霊に満ちて人々の前に立たれた時に「既に成就した」と仰った。そしてそれを本当にキリストは身を以てなしとげられた。そのあとに我々は今、生かされてい

●そのことに本当に気付きなさい

ですから、聖書を読む時にそのくらいの読み方をしないとダメなんです、文字にとらわれたらね。小池先生はそれを仰っている。おそらく先生にとつては、旧約聖書も新約聖書もまどろっこしくて仕方がないんですよ。だから、どこを読まれてもその先を読んでも、そしてローマ書に来たら「もう成就した」というその事態を受けとつておられた。それも自分が何者かになったからそうなんじゃないかと、徹底的な平伏しなんです。

「自分は何者でもありません。本当に全部キリストがしてくださいました。私は自分ですることは何もありません」

と。私が今日、申し上げたいことは、皆さん——これは私も含めてですが——いつも、

「まだ何か足りない、まだ何か足りない」

と、「足りない、足りない」と思っておられるのではないかと思う。

「もつとこんなふうにならなれないとダメだ。もつと靈的に凄くならなければダメだ。もつと知的に素晴らしくならなければダメだ。まだ足りない、まだ足りない」

と。この世の人は、「まだお金がたりない、まだお金が足りない」とやっていますけれども、我々はさすがにそんなことは思いませんよね。そのほうはもう卒業しているけれども、靈的な面で、信仰の面で、

「まだ足りない、まだ足りない。もつと祈らなくては」

と思っておられるのではないのでしょうか。ところがそれは逆なんです。もうすべて満たされたんです。

「すべて満たされてしまっている。そのことに本当に気付きなさい」

と。先生は本当に気づかれたんです。本当に気付かれたから、有り難くてしょうがない。



本当に気づかれたら、力が来て、豊かに満たされて満たされて、あふれてあふれてしょうがない。これが先生の最晩年の告白なんです。

だから我々のなすべきことは、まずどんなにキリストが我々のために凄いことをしてくださったか。どんなにキリストが凄いものをもつて満たそうとして待ちかまえていてくださるか。来る日も来る日も、今日も明日もその次の日も、そのキリストの圧倒的な恵みの迫りのみ思いに、いつもいつも気づいているということ、いつもいつも感謝しているということ、いつもいつも平伏しているということなんです。「まだ足りません、まだ足りません」なんて、おねだりすることではない。

「主様、ありがとうございます。本当にあなたはすごいことをしてくれました。

今日一日の糧を今日もお与えください」

と、一日の祈りはそれだという。

「主様、あなたのみ意がこのちっぽけな私を通して成ってくださいませ。あなたの御業がこの身を通して現れてくださいませ。私のことに関しては何も言うことはありません。全部あなたがしてくださいませ。本当にありがとうございます。

だから今日一日、どうぞ、あなたのみわざをこの身を通して、今日一日の生活の中で成就してください」

と。私たちはそれぞれのところへ遣わされてある。私たちの置かれている場、職業もそうです、家庭の主婦もそうです、ボランティアの入もそうです。どんなところへ遣わされていても、それはみ意によつて遣わされてあるんですよ。自分ではないんです。

「いえ、私は今は無職で何もないんですが」

と。無職の中にキリストの聖旨が現れるよ、絶対現れる。

「いえ、私は病気で寝たきりなんです」

寝たつきりの中にキリストのみ旨が現れる。本当にそうなんですよ。

●在らしめられて在る

だからそのようにもう、「今在る」ということが「在らしめられて在る」んです。「肉」というのは、生まれながらのあるがままの我でしょ。それは否定されたんですよ、肉はダメなんですよ。それを十字架で徹底的に否定して、

「さあ、お前に新しいお前をあげるよ。それは私と一つになっているお前だ。私が

乗り移っているお前だ。そこで生きるお前は、昨日までのお前じゃないんだよ」

という。そういう全く生まれ変わったお前を日毎に上げよう、与えようとしてくださっているのが恵みなんです。そのことに気づいてほしい。

「ひと新たに生まれずば」

と仰るけれども、



「もう生まれしめたではないか」
「本当に生まれしめてくださったんですか？」
「そうだよ」

と。それをローマ書の8章は宣言している。どこで？ 十字架で。十字架は既に完了ですよ。そこに私は何を付け足すんですか。

「いや、祈りが足りないよ」

と。足りないのは「私」なんです。私の「肉」は足りない。「祈れ」と言われたって、祈れないんですよ、「肉」はね。

「だから、主さま、祈りの霊を下さい。祈りが足りないなら、祈りの霊を下さい。私に代わって、あなたは折っていただきますね。ありがとうございます」

と、これは怠け者にとつての福音なんです（笑）。その怠け者を物凄い働き者にしてくださるのがキリストなんです。だから、全部、逆転です。サタンは来ますよ、

「お前、祈ってないね」

「ああ、祈ってない」

「どうするの？ 祈れ！」

「うん、キリストに祈ってもらおうよ」

と。キリストがすべてを私に代わって成し遂げてくださいました。何も心配いらぬ。

「主様、ありがとうございます！」

と、そこへ徹底することです。そこへ徹底されたのが小池先生です。なるほど、先生はかつてものすごく祈られました。三日間断食して祈られたこともあります。いろんなことをなさいました。けれども、いろんなことをなさいた挙げ句の果てに到達されたのは何か。

「何もこちら側にはないんだよ、こちら側は無者だよ」

と、それなんです。こちらの側がすることはいささかもない。

「徹底的な全托、委ねだ。受けとるだけだ。上から来ているものを受けとるだけだ。受けとる場はどこなんだね。十字架の場だ、平伏しの場だ」

と。自分で無になれないでしょ、自分で貧しくなれないでしょ、自分で砕けないでしょ。だからキリストは砕けてくださった。自分で祈れないから、キリストは私に代わって祈ってくださいている。自分でサタンと闘えないでしょ。だからキリストは荒野の試みで闘って勝ってくださいました。キリストがしてくださいましたことは全部あなたのためなんです。

「それはできないあなたのためだよ」

と。逆に、あまりできる人は困る。できる人は自分に誇りをもつ。できる人は徹底的にキリストに縋すがれない。できるから他を審きます。だから徹底的に無力に徹して、できない自分に開き直っていることです。



●無者キリスト道

その角度を言ってくれたのが親鸞です。今、読売の新聞小説で親鸞を取り上げている。法然から始まっている。ちよこちよこ見てください。あれは「小説親鸞」ということになっていますけれども。やはり、当時の仏教は修行です。天台宗、比叡山。そういう所で修行して、行によって仏の世界に入っていくという。その道に対して、親鸞は徹底的に折り込んだ、「もうだめです」と。祈りの中で聖徳太子に出会っている。そして、彼が到達するのは法然の道だった。それはもう徹底的に念仏を唱えるしかない、念仏にまざる善はないという。

我々だったら、この「無者キリスト道」です。無者キリスト道にまざる善はない。

「私は、祈れません」

「祈れないからこそ救われるんだよ。キリストが祈ってくださいって、お前を救ってくださいる」

「私、煮ても焼いても食えません」

「わかつているよ。煮ても焼いても食えないお前を本物にしてくださいるのがキリストじゃないか」

と。すべてキリストが徹底的にやってくださいる。それに徹底的にゆだねていく。その角度、それだけなんです。

その角度をこれほど徹底的に告白してくださったのは小池先生の他にありません。どんな牧師も、どんな司祭さんもここまで徹底して無者キリスト道を告白しつづけた方はありません。だから我々はそれに従う。少なくとも私はもうそれしかない。

私の修行の場はどこかというところ、職場です。日々の生活です。私たちは聖職者としてどこかあるグループの中に、地上から取り去られて修行をつむような、そんな生活には導かれていません。みんなそれぞれ普段着のまま、そのまんま、今あなたのあるところが修行の場です。聖霊の修行の場、御霊を受けとる場、そこでキリストが輝き給う場です。そこで光り輝く、「私が光り輝くぞ」と。キリストは、

「汝は世の光なり、何となれば私が汝の中で光り輝くから」

と。まさにこの現世の娑婆で、本当の福音の光があらわれる。「それを実践しろ」と言ってくださいっているのがキリストの福音なんです。先生は、

「とり澄ました、そんな清さじゃない。また人間的な立派さじゃない。破れのまま
でいいんだ」

と言われた。一番破れている姿は家庭じゃありませんか。人前でない、家庭にある姿——子どもから見たら、

「本当にしようがない親父おやじで、だらしない親父だ」

と思われるような——そういう家庭の場が破れた場であって、その破れた場にキリストが光り輝き給う。



もしご夫婦がクリスチャンだったら、お互いその破れをそのまま受けとって、そしてキリストはそのまま生かしてくださいということを受けとつていく。そして、自分を立派にしようなどと思わないで、遣わされた所へどこへでも行くという、人のためにとりなしの祈りをするという、そちらに熱中したほうがいい。自分を立派にしようとか、自分の信仰を高めようとか、自分の聖書知識を高めようとか、そんなことに意を用いないで、人助けをする、人のために働く、そのために心を一つにするご夫婦であつてほしい。

●「はいっ」と言つて平伏す

パウロも言っているんです。ローマ書4章で、

「³聖書に何と云えるか『アブラハム神を信す、その信仰を義と認められたり』」

と。アブラハムは神様に、

「はいっ」

と言つた。御言の前に「はい」と言つて平伏した。

「お前の子孫は空の星のように、また、海辺の真砂のように無数にふえひろがるぞ、

私は約束するぞ、わが意だよ」

と、そんなふうに響いてきた。そこでアブラハムは「はい」と言つて、そこに平伏した。自分の年老いた姿もサラが石女うますめであることも全部かなぐり捨てて「はい」と平伏した。それを神様は義と認められた。

「よし。それでいいんだ」

と。こんなに単純で簡単なんです、このアブラハムと神様との関係は。「お前の行いが立派だからお前を義とする」とも、「お前の信仰が立派だから義とする」とも、何も仰らない。「はい」と言つて平伏したその姿、それだと。

何か「アブラハムは信仰が立派だ」と言つて、いかにもそのもろもろの信仰が立派というふうには誤解されまされなくても、そんなことではない。アブラハムもよく疑つてもいますし、よく躓いてもいますし、よくフラフラもしています。決して誉めたものではありません。

神様が義とされたのは、「はい」と言つて平伏したその姿なんです。そこでアブラハムは受け入れられた。アブラハムは聖手に捕まえられた。その捕まえられたことは最後まで変わらなかつた。神様の故なんです。アブラハムの故ではないんです。神様が「よし」と言つて捕まえられた。それを最後まで貫かれた。むしろ、神様のほうからアブラハムを信じぬかれた。どんなにアブラハムが躓いても転んでも、ひとたび「よし」と言われたら、それを神様は捨てられなかつた。そして、その約束の故にイサクを与え、そしてあの躓きのイサエルも顧みられた。そういう貫きなんです。神様の側の貫きです。



●無即無限無量

そこで、パウロはこんなふうに言いました。

「⁴それ働く者への報酬は恩恵といわず、負債と認めらる。」

「これは報酬だ、お前はこれだけよく働いた。これだけの報酬、ごほうびをあげる」というのが報酬、給料ですね。それは雇主のほう^{やとぬし}が負債になります。働く者にはお金を与えなくてはならない。

⁵されど働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたもう神を信する者は、その信仰を義と認めらるるなり。

「働く事なくとも、敬虔ならぬ者を義としたもう神、これを受けとる者は、そういう「はい」という姿が義と認められるんだ」と。ちよつとパウロさんは、もつてまわった言い方をしていますけれども、要するに

「自分の側の何のものでもない、主様あなたの恵みだけです」

と言って投げ出している者、これを受けとつてくださる。これが本当の信という関係だということですよ。

⁶ダビデもまた行為なくして神に義と認めらるる人の幸福につきて斯く云えり。曰

く⁷『不法を免され罪を蔽われたる者は幸福なるかな。主が罪を認め給わぬ人は

幸福なるかな』(ロマ4・4〜8)

こちらのマイナスを全部消していただいた者は幸いなるかな。「お前は真白だ」と言っていただけの者は幸いなるかな。真白にしてくださいましたのはキリストなんです。キリストの十字架が私を真つ白にしてくださいました。あなたを真つ白にしてくださいました。そして、真つ白なところに聖霊という宝を、生命をくださいました。

「それで生きろ、それだけに縫って生きろ。ほかのものは問題にするな」

と。「まだ足りません、まだ足りません」なんて言うことは何もいらない。聖霊は無限無量なんですよ。聖霊を感謝し、崇めておればあとは独りでに、力をくださって働かざるをえない。働きがなくて義と認められる。今度は聖霊という働き虫です。慰め主です、愛の霊です。愛の霊は人助けの霊です。そして非常にクリエイティブな、創造的な霊なんです。

芸術をなさる方は芸術の面で、それぞれの面でその人を100%生かし給う。神様が人を創られた時は素晴らしい存在として人を創られたんですね。神の栄光を顕す存在として創られた。それがつまずいてやり損なったから、もう一度、いや最初より以上の、素晴らしいものに新創造なされた。それが我々なんです。だから、小池先生は「無即無限無量」と仰つた。それに私たちは賭けていいこうじゃありませんか。

●ただあなただけ

もう私は自分に愛想をつかしたから、本当にそれに賭けているんですよ。



「二日一日あなたのみ恵みによって、あなたのみ力によって、聖霊によって今日一日を導いてください。裁判所での仕事をなさしめてください。私の知恵ではありません、あなたの天来の知恵です。未だかつてなかったことを、なさしめてください」

と、そのくらいの気持ちなんです。

「自分ではありません。あなただけです」

と。それは裁判所だけではありません。どこにいても、誰に接していても、どういう所でも、自分が置かれている場、遣わされている場、そこで主が働き、主がなし給う。こちらは朝毎に感謝、そして讚美です。本当に感謝すれば、本当に讚美できます。そうでしょう。感謝するには、

「こんな凄いことをしてくださった」

という、やっぱり我々はエゴイストですからね、

「これだけのことをしていただいた」

ということを知らないと、何もないのに感謝できない。何もないのに喜べないですよ、本当のところね。

「こんな凄いことをしてくださった。だから、喜ばないでおれようか」

と。こういうことですね。

それを歌っているのが詩篇103篇です。これは第十卷(『聖は大ドラマである』)にもちゃんと引かれていますから、そこを先生の訳でまた読んでください。文語訳で読みますと、

「^{たましひ}わが靈魂よエホバをほめまつれ ^{うち}わが衷なるすべてのものよ ^{みな}そのきよき名をほめまつれ ²わがたましいよ エホバを讚めまつれ ³そのすべての恩恵をわする

るなかれ ⁴エホバはなんじがすべての不義をゆるし ⁵汝のすべての疾をいやし

^{いのち}なんじの生命をほろびより贖いだし ^{いつくしみ}仁慈と憐憫とをなんじにこうぶらせ

^{よきもの}なんじの口を嘉物にてあかしめたもう ^{わかや}かくてなんじは壮きて驚のごとく新に

なるなり」(詩篇103・1〜5)

すべての恵みを忘るるなかれと。どんな重病人であつても根源的に癒されてあります。地上でたとえ病が癒えなくても、根源において癒されてあります。あなたは天界にすばらしい霊体となつて輝きます。あなたの生命を滅びから贖いだし、仁慈と憐憫をこうむらせると言つてくださる。もう私なんか、こんなにくさん言つていただかなくても、ロマ書8章のはじめのところのあれだけで、

「すべてキリスト・イエスに在らしめられて在る者は罪に定められず、キリスト・

イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり」(ロ

マ8・1〜2)

と。もうあれだけで充分です。詩篇103篇もその心でしようけれど、たとえ病が癒されずとも、



たとえ他にいろいろこの世では欠けたるものがいっぱいあろうとも、そんなことは問題じゃない。もう根源的に、

「キリスト・イエスの中に在らしめられて在る」

という、もうそれだけで充分です。キリスト・イエスが私を抱いていてくださる、いついかなる時にも。詩篇139篇にありますように、

「²なんじはわが坐るをも立つをもしり又とおくよりわが念おもいをわきまえたもう……

⁵なんじは前より後よりわれをかこみわが上かみにその手をおき給えり」

と。四方八方から包んで抱いていてくださる。もうそれだけで充分。その主様は、私の罪も病も全部、根源的に片づけてくださった、永遠の生命を既にくださった。もう何一つ欠けたるものはない。いつもイエスの中に抱かれてあり給う、もうそれで充分です。

小池先生の、

「有難くてしようがない、楽しくてしようがない」

というのはそこから来ていると思う。そしておそらく、先生と私と違うところは、先生はもつとリアルにキリストの力を味わっておられるからだと思います。

「力が来てしようがない。祈っていれば身は火の如しだ」

と。そこが私とだいぶ違うところなんですけれどもね（笑）。そこまでリアルに感じられるというのは、先生は凄いと思います。でも、根源的、本質的には一緒だと思っている。

ですから、少なくとも我々キリスト者、キリストに在らしめられて在る者は、もうあんまりおねだりばかりするのは止めましょう。

「まだ、これが足りない。あれが足りない」

ということを言うのはやめましょう。まず、感謝です。

「ありがとうございます」

と。そして御名を讃えます。

「ありがとうございます、御名を讃えます！」

と。生活の中でそれを実践することです。

もう私の申し上げたいことはそれだけです。あとは本当に主がどんな素晴らしいことをなさってくださいるか刮目かつもくして、みなさん一人ひとりを私は見ていたいと思います。皆さんは私を見ていてください。その中に働きたもうキリストを見ている。本当にキリストを見ているんです。

私は、この新宿集会はすばらしいと思っている。それは何が素晴らしいか。皆さんが互いに助け合っているから。互いのことを思いやっているから。キリストにあつて皆さん輝いておられるから。だから、素晴らしいと思っている。

皆さんができる形で、お茶のサービスをし、お掃除をしというふうにして、みなそれぞれが自分のできることをなさっている。



「いえ、私は何もしてません」という方は、

「いや、そこに存在して祈ってくださるだけで素晴らしいんです」

と私は申し上げたい。存在そのものが光り輝いている、これがすばらしい。見えるところではなくて、その存在そのものの中にキリストが溢れて輝いてくださっている、そういう姿で集まって、互いに祈り合っている。これが素晴らしいんです。

どっちかいうと、小池先生がいらつしやる時の武蔵野集会はピリピリしてましたね。何か、先生のようにならねばだめだ、司会者は先生の前で立派なことを言わなければだめだと、何かいきりたっていましたよね、そうじゃありませんか。今は、皆さんはリラックスして肩の力がぬけておられる。本当に先生は、僕は喜んでくださると思う。あの先生がいらつしやる時の武蔵野集会は、他人のことを顧みる余裕はなかったですよ。でも今は、本当に肩の力を抜いて、ただただただ。雨が上から降ってくる。恵みが上から注いでくる。それをいただくだけ。いただくだけです、その姿に徹していく。今日はこれで終わります。

● 祈り

主様、ありがとうございます。この新宿集会の一人ひとりをあなたがこよなく愛してくださり、一人ひとりをあなたの十字架でもって徹底的に贖いとり、あなたの聖霊の生命を一人ひとりの中に充満せしめてくださり、

「いいんだよ、いいんだよ、私だよ、私だよ」

と、あなたのほうから胸の扉を叩いてくださり、

「気がつけば、それでいい。御名を讃えていこう、讚美、感謝でいこうよ」

と、あなたが呼びかけてくださって、ありがとうございます。

主様、兄弟姉妹はいつも平安の中にあつて、輝いておられます。主を讚美しておられるからです。

「よきものをもて満たらしめ給う。我に乏しきことなし」

と。そのみ言は全部成就しております。

主様、詩篇23篇も詩篇103篇も、イザヤ書53章も55章も61章もことごとく、主よ、あなたが成就してくださいました。私たちは溢れるほどのあなたの恵みを、この身いっぱいいただいて、体全体であなたを讚美し、またあなたのご恩に報いていきとうございます。いよいよ我らを炎の人とならしめ、あなたのみ霊の生命に満たしめ、燃やしめてください。

今日はおいでになっていませんが、キャンプに行つていらつしやる牧子さん、朝子ちゃん、淳也くんをどうぞお守りください。またおいでになっていない一人ひとりの上にも、あなたのみ恵みがいっぱいにありますように。各地で祈っている今日の集会をどうぞ今、満た



してください。

主イエス・キリストの尊き御名によつて、この祈りをみ前にお捧げいたします。アーメン。

〔編集後記〕

石川京子さんがテープを起こしてくださり、その原稿をもとに大半を朝子が、残りを私がパソコンで打ち込み、それをさらに私が改行などの手を加えて、読みやすくしたのが、この第8号です。石川さんのきれいな筆記体のままコピーしたらそれだけで十分価値があるし、むしろそのほうが親しみやすいと思つたのですが、今回から、こんな形にリニューアルしてみました。

引越し、父の蔵書の整理、吉祥寺東町四丁目十五の十九の自宅と集会場の解体、という一連のことを龍一が中心になつて、昨春秋から12月の間に行いました。新宿集会のみなさんに祈つていただき、具体的に助けていただき、励まされ、どうやら体を壊さずに2001年を迎えることができました。まことに感謝・讃美のお正月でありました。私のパソコンも買い、仕事もバリバリやれそうな新年です。第7号まで私は、ワープロに向かつて奥田先生のお声をイヤホンで聞きながらの作業をしましたが、8号は、ずるずると引き延ばしていたのに、石川さんと朝子の協力で、いち早くまとめられました。奥田先生もびつくりされ、新宿集会のパワーはすごいと、すぐに校正を戻して来られたので、これから西兄弟にプリントをお願いするところです。

2001年1月25日

小池牧子

〔東京キリスト召団新宿集会だより〕No.8から転載。録音から本文庫の段落スタイル等に再編集

